博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　浦田　和幸

学位申請者　山田　玲央

論　文　名　On the 'be done' Construction in Irish
（アイルランド語 'be done' 構文について）

結論

山田玲央氏から提出された学位請求論文 On the 'be done' Construction in Irish（アイルランド語 'be done' 構文について）について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は浦田を主査に、副査として本学の黒澤直俊教授、成田節教授、野元裕樹准教授、主任指導教員である風間伸次郎教授を加えた５名で構成された。

論文の概要

本論文はアイルランド語の 'be done' 構文の本質を解明した論文である。先行研究では、この構文は受動とされることが多いが、能格構文とする主張もある。本論文は英愛対訳コーパスを用いた英語との対照とアイルランド語電子コーパスを用いたアイルランド語動詞の詳細な調査によって、この構文が被動者を主語とし、完了相において能格型の格標示がなされる特殊な能動文であることを明確にした。

本論文の構成は以下のようになっている。

第 0 章では、本論文で扱う 現象を簡潔にまとめている。アイルランド語は VSO の基本語順を持つ(この構文を「単純時制構文」と呼ぶ) が、本論文で問題にする 'be done' 構文では、単純時制構文における O が文法的な主語に昇格し、S が任意的な前置詞句へと降格する。こうした項の操作が見られることから、先行研究では当該構文は「受動」と記述されていることが多いが、「能格」的な特徴を持つ完了構文とするものもある。

第 1 章では、アイルランド語に関して、先行研究に基づいた基本的な情報を記述している。言語学的な分類、方言、音韻論、文法を簡潔に示した後、本論文で最も重要なアスペクトとヴォイスの記述が続く。アイルランド語には、'be done' 構文の他にも、「非人称受動」をはじめ、しばしば「受動」と称される構文が複数存在する。

第 2 章では、先行研究をまとめている。まずは類型論的な情報として、受動

に関する先行研究と能格性に関する先行研究がまとめられ、その後にアイルランド語 'be done' 構文に関する先行研究が続く。この章では先行研究の記述を受け、当該構文の記述としてより適当なのは「受動」なのか「能格」なのか、という問題提起をしている。加えて、当該構文がどのような状況で使用されるものであるのかも問題としている。

第 3 章では、本論文で用いるコーパスを示している。本論文では対照研究の観点からアイルランド語と英語の対応表現の調査と、電子コーパスを用いたアイルランド語の動詞用法の詳細な調査を行っているが、前者についてのコーパスは英語原作小説及びそのアイルランド語版とアイルランド語原作小説及びその英語版による対訳コーパス、後者についてはインターネットで公開されている電子コーパス Nua-Chorpas na hÉireann (The New Corpus for Ireland) から得た動詞 100 語の用例を含むものである。

第 4 章では、1 つ目の調査であるアイルランド語・英語の対照研究の結果と考察を述べている。具体的には、アイルランド語の 'be done' 構文に対応する英語の構文、英語の受動構文に対応するアイルランド語の構文、英語の完了構文に対応するアイルランド語の構文という 3 つの対応関係が主な内容である。その結果、他動詞の場合、アイルランド語の 'be done' 構文が前置詞による動作主句を取らない場合は英語の受動構文に対応する傾向が見られた。反対に動作主句を取る場合、英語の受動構文に対応する例はごく少数にとどまり、むしろ英語の完了構文に対応する傾向がある、というものであった。この場合、両言語間で各項が持つ主語や目的語などといった文法的な機能が交替している。自動詞の場合は、アイルランド語の 'be done' 構文は英語の完了構文に対応する傾向にある。このように動詞の自他によって、両言語間の構文の対応関係が異なることから、本論文では、アイルランド語の当該構文は「能格」的な特徴を持つものである、と結論付けている。反対に、英語の受動構文を基準として見た場合、一回性のある出来事では、非人称受動に対応する傾向が見られた。このように、英語との対照から当該構文の機能を調査したデータは貴重である。

第 5 章では、もう 1 つの調査である、コーパスから得られた動詞 100 語を用いた調査について述べている。100 語の動詞それぞれについて、単純時制構文で用いられている用例数と 'be done' 構文で用いられている用例数とを割り出し、そこから各動詞の 'be done' 構文の適用率 (「スコア」と称する) を提示しているが、このように定量的なデータによって当該構文の特徴について探っている点に大きな意義がある。まずは調査結果として、スコア順に 100 語の動詞が挙げられているが、概ね結果性の高い動詞ほど 'be done' 構文が用いられやすいという結果が得られた。「食べる」と「飲む」など、意味的に類似しているような動詞が同程度のスコアを有していることからも、結果性と 'be done' 構文との関連性が伺える。その後、100 語の動詞の一部を 6 つの動詞グループに分けて、それぞれの特徴を記述している。そのうち、「知覚」動詞では look や

listenにあたる動詞よりも、seeやhearにあたる動詞の方が高いスコアを持つ傾向があり、これには他動性ともある程度の関わりが見られる。「移動」「発言」「心理」に分類される動詞は基本的に‘be done’構文が用いられにくいという結果も得られた。ただし「移動」動詞のうち、「立ち去る」という意味の動詞は例外的に高いスコアを有する。このことも結果性の観点から説明が可能である。次に、統語的特徴と‘be done’構文との関係についての考察が続く。ここでは、自動詞のSが他動詞のAに対応する動詞（agentive verbと称する）よりも、自動詞のSが他動詞のOに対応する動詞（paticntivc vcrbと称する）の方が高いスコアを有する傾向にあること、句動詞のように‘be done’構文において文法的な主語に降格すべきOを持たない動詞が当該構文で表現されることは稀であることなどが述べられている。加えて、アイルランド語に存在する2種類のゼロ主語構文と‘be done’構文との関係性も論じられている。最後に、動作主の人称制限について考察している。アイルランド語の単純時制構文における動作主と‘be done’構文における動作主との間には決定的な人称制限の差が観察されず、後者の構文においても、1人称や2人称の動作主が問題なく使用できる。この特徴をより明確に示すためにフランス語受動文における動作主人称についても調査を行っているが、フランス語では強い人称制限が観察され、1人称や2人称のものはほとんど現れない。

第6章では全体のまとめと今後の課題が述べられている。

審査の概要及び評価

上記のように山田怜央氏の博士論文は、新しい知見を多く示しつつ、アイルランド語の‘be done’構文が能格構文としての特徴を示すことを明らかにすることに成功している。

本論文の内容に関して、各審査委員からさまざまな評価がなされた。各委員より特に高く評価されたのは、以下の点である。

・両方向の翻訳によるパラレルコーパスを使い、問題の構文だけでなく単純時制構文のデータも詳細に調べて結果を対照するなど、研究方法が非常に手堅い。
・ヴォイスとアスペクトという、相互に深く関連する文法カテゴリー間の状況をよく見極め、全体の体系を考察することによって問題を解明している。
・この言語の全体像をよく把握し、背景となる関連事実を正確に踏まえた上で、中心課題の‘be done’構文の特性を解明している。
・特に印欧諸語に関する豊富な知識を活用し、他のケルト諸語の状況にもよく目を配っている。
・豊富なデータを集め、丁寧に分析している。英語の説明文も分かりやすい。

もちろん本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験において、審査委員からいくつかの質問、要望が出された。その指摘のうち、重要な点としては以下のようなものを

あげることができる。

・「受動」の定義は研究者によって大きく異なるので、本論文での定義を十分に考えておく必要があったのではないか？ 「能格絶対格構造」の定義についても同様である。
・情報構造が問題になっているが、これをもっぱら人称の問題として分析している。
・パラレルコーパスには意訳もある上に、そもそも訳であるため構造的に対応しているわけではない、という点に注意が必要である。
・エリシテーション、すなわちネイティブ・スピーカーに訊く、という方法によってこそ明らかになる点もあるのではないか？

各委員からのこれらの指摘も、本論文の価値を高く評価した上で今後のさらなる研究の進展を期待したものであり、建設的な意見として提言を行っているものといえる。

最終試験における質疑においても、申請者の応答は的確で、委員たちとの間で学問的に興味深い議論が行われた。その過程から、申請者が指摘された問題点をよく自覚し、今後それらを解明していくのに十分な学識と強い意欲を持っていることが確認された。アイルランド語文法全般の記述研究の進展、さらにはアイルランド語およびアイルランド語を含むケルト語派の諸言語の記述研究・対照研究・類型論的な観点からの研究に関して、申請者の今後の活躍が十分に期待できる。

審査委員会は、学位請求論文の内容、ならびに最終試験（公開審査）の結果より総合的に検討した結果、全員一致で申請者山田玲央氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。